

## 5 - 4 土地利用と集落

### (1) 土地利用

ボツワナの土地利用状況は、放牧地（国土の77%）、耕地（2%）、国立公園と鳥獣保護区（17.5%）、沼沢地と河川（2.7%）、森林（0.5%）、都市及び工業用地（0.1%）となっている。約58万km<sup>2</sup>の国土に約400の都市と村落しかないため各村落は孤立しており、各村落が利用できる土地も広大である。そのなかでツワナ人の村落（特に南部）は、居住地（村）外側に耕作地（村から平均15kmまで広がっている。かつては耕作地が遠くなると村ごと移動していた）があり、その外側に家畜放牧地cattle post（村から150kmを超えるところもある）が広がるというものである。中心集落から離れ、家畜とともに放牧地に住んでいる人々もいる。

### (2) 集落の形態

伝統的な狩猟採集民バサルワ（ブッシュマン）は伝統的には定住地を持たず、移動を繰り返していたが、現在では政府の定住化政策が進んでいる。また国民の多数を占めるバントゥー系の民族（ツワナ人を含む）では、家屋が集中した定住集落を昔から作ってきた。かつてヨーロッパ人はツワナ人の集落の大きさ（しばしば2万人以上）に驚いたと記録されている。分散形態の集落が多いのは、北東、ンガミランド、ガラガディ各地方とバロロング農地そして集村から離れた耕地と放牧地などである。

伝統的なツワナの集落は中心に家屋が集中する形態をとっており、いくつかの家屋（囲い地）からなる区kgotlaに区分される。それぞれの区には区長headmanがいる。集落の中央には集落の中心となる区があり、その周りに他の区が位置している。区長の近くには区長のボディガードたちが住み、更に区長の召使いたちが住む区がある。その外に、区長の親族が住むゾーンがある。外周に移入者（この部族に入ってきた者）の住むゾーンがある。この様なゾーン区分は今でも意識はされているというが、人口増加とともに形態は変化してきている。いくつかの区や区の一部が集落の周辺に移動しており、近年は区にとらわれず家屋単位で移動している。家屋は、家畜が夜を過ごす囲い地kraalを囲んで、半円型あるいは馬蹄型に集まっていることが多い。大きな村だと耕地や放牧地から遠いため、中心集落から離れて耕地や放牧地にだけ家屋を持っている世帯の数も多い。そこでは家屋は互いに離れ、分散した集落形態となる。

### (3) 家屋

国内にはバサルワ（ブッシュマン）のように簡単な小屋しか作らない民族もいる。しかしバントゥー系民族は、主屋を中心に庭や貯蔵庫のある囲い地に居住してきた（図5 - 3）。ツワナ人の伝統的な家屋は、土で作られた丸い壁と草葺きの屋根であるが、1930年代からポーア型といわれる土壁と草葺き屋根の円筒形の家屋が広まった。同じころ、以前より大きな四角い家屋が立てられるようになった。独立以来corrugated sheetsトタン屋根が広がっている。現在最もよく見られるのは、1～2部屋の間取り、平らなトタン屋根の家である。近頃は4～5部屋の大きな家がよく建てられるようになっている。

## 5 - 5 公共施設の所在

### (1) 教育機関

独立以降、政府は非識字者の減少をめざして学校建設を進めてきた。現在は600校以上の小学校、170校の中学校がある（図5 - 4、5 - 5）。

しかし人口が稀少で集落が分散しているため、適正な学級規模を維持するためには通学圏を広くしないといけない。広いと児童が通いきれないため、通学圏人口が1,000人以下の所では2年に1回しか新入生をとらないというような方法が採られている。

ボツワナ国立図書館サービスは全国の小学校を対象にPVによる照明を導入しており、1997年までに1村に導入されている。またDEMSは未電化村落の学校（中学校）や診療所、政府機関約500に小型ディーゼルエンジンを設置しサービスを供給している。

### (2) 医療機関

近年、ボツワナ政府は農村部で医療機関へのアクセスの充実を図っている。医療サービス機関は、対象地域の人口によるいくつかの段階に分かれている（表5 - 5、図5 - 6）。国内には約400村があるので、国内に約360あるヘルス・ポストのレベルで約90%の村をカバーしていることになる。ただし、本村から離れた放牧地で暮らしている人々を考慮すると、移動診療所の充実などが必要であろう。

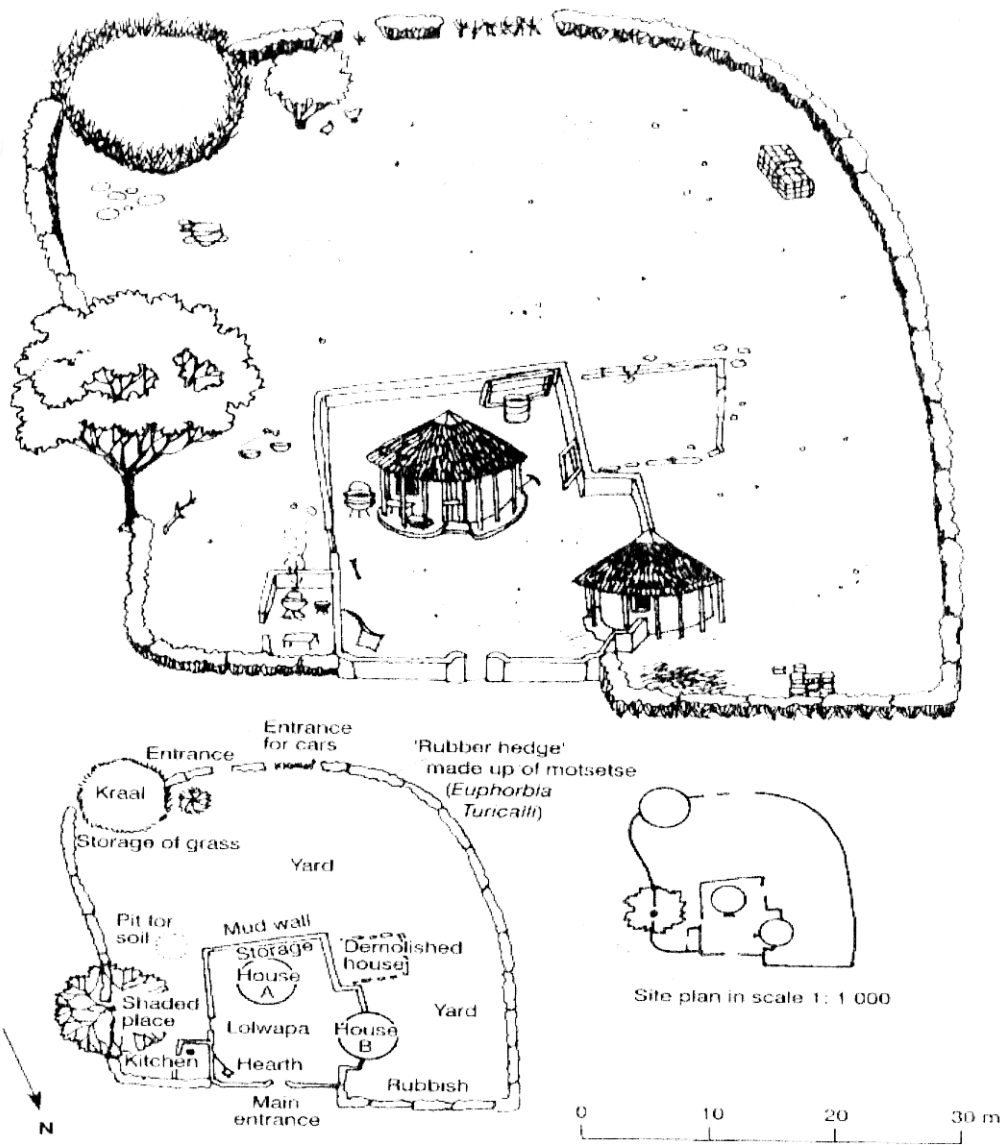


图 5-3 一个家庭的传统居住单元。